# なにわの中医学
## ―その歴史と，受け継がれる中島随象の遺伝子―

西本　隆

医療法人社団岐黄会西本クリニック
神戸大学医学部附属病院漢方内科

「なにわ」における中医学の現状を地理的・歴史的に振り返り，また，森道伯の流れをくみ，関西で唯一，一貫堂医学を実践した中島随象とその弟子たちの，中医学との関わりについて考察を行った。「なにわ」は現在の大阪市周辺の異称であるが，江戸時代にこの地域が国内および海外からの生薬の集散地となったルーツは，国際貿易港としての堺，あるいはそれに遡る兵庫港にあると考える。また，明治期以降に森道伯によって体系づけられた一貫堂医学を関西において唯一実践した中島随象は，当時の中医学を「新しい東洋医学」を作るために必要なものと考えていた。その随象の弟子たちは，地域に根ざした漢方を求めた三谷和合，新しい医学体系を模索した山本巌，中医学を極めた伊藤良，公立の東洋医学研究機関の長として新しい東洋医学を作ろうとした松本克彦など，いずれも，随象の融通無碍かつ納新の遺伝子を受け継いだ者たちであり，現在，さらにその遺伝子が関西を中心として広まろうとしている。

**キーワード**：中医学，なにわ，中島随象，一貫堂

## 緒言

伝統医学のフィールドにおいては，歴史や地域などを多元軸としてさまざまな主張や方法論が複雑に絡み合っている。特に，現代日本における中国伝統医学は，それを規定するための言語にはじまり，日本漢方の位置づけや現代中医学に対する評価，教育のあり方など，多方面にわたって混沌を極めている状態であり，それらを短絡的に一元化しようとすればするほど混迷の度合いを深めているようにも思える。本稿では「なにわの中医学」という第４回日本中医学会学術総会の統一テーマのもと，なにわ（大阪）に中国伝統医学が根づいた歴史的背景を振り返り，あわせて，中島随象という１人の漢方医とその弟子たちの足跡をたどること

で，現代日本における中国伝統医学のありかたを考えてみたい。

なお，本稿は，第４回日本中医学会の会頭講演「Raise to a higher dimension」をもとに加筆訂正したものである。

## 兵庫港から堺へ

「なにわ」とは大阪の異称であり，「浪花」「難波」「浪速」の３種の漢字が充てられることが多い。その由来にはいくつかの説があるものの，「日本書紀」のなかに「方に難波の碕に到るとき，奔潮有りて，太だ急きに會いぬ。因りて以って名づけて浪速の国と為す。亦浪華と曰ふ。今な難波と謂うは訛れるなり。」とあるように，現在の大阪城のあたりに大きな潟（入り江）があり，そこの水が，大阪湾の干潮時に奔流（早き波）となって流れ込んだことが「なにわ」の語源であるという説が有力のようである[1)]。

「なにわ」の発祥，特に「天下の台所」といわれるようになった江戸期の大阪を考えるとき，そのルーツの１つとして，兵庫港（現在の神戸港）を知る必要がある。10 世紀末に中国に生まれた宋王朝は，それまでの貴族制度を全廃して，経済や社会を徹底的に自由化して貨幣経済を行き渡らせ，政治秩序においては皇帝の一極支配を行うという，これ以降現代まで一貫して続く中国の集権体制の基礎を作ったといわれる王朝であるが[2)]，この体制を日本において模倣しようとしたのが平清盛であった。その清盛が，巨大王朝である宋との貿易の拠点としたのが「大輪田の泊」つまり後の兵庫港，現在の神戸港である。すなわち，日本の近世の始まりにおける最初の国際貿易港が兵庫港（つまり神戸）であり，当時，世界最先端の文明が兵庫港を通じて日本に輸入されてきたといっても過言ではない。その後，平氏政権は源氏に滅ぼされ，その鎌倉政権も室町幕府に代わられ，また，中国では，宋から明朝への政権交代があるなどの変遷を経ながらも，兵庫港はその後も，遣明船の発着港として，すなわち，当時の日本における対外貿易の拠点として栄えることになった。

しかし，1467 年に始まり 10 年以上にわたって続いた応仁の乱は，遣明船の発着地であった兵庫と瀬戸内海航路を戦乱に巻き込み，そのため，遣明船は高知沖を通って，大阪の南方にある堺の港に発着せざるを得ない状況となった。ここに，東アジアを舞台とする外国貿易港としての堺が一躍発展することになり，経済力を蓄えた商人たちが堺を１つの都市として自分たちでその運営を行うようになったのである。つまり「会合衆（かいごうしゅう）」による自由貿易都市堺の始まりであった。

## 堺の衰退と道修町

しかし，このような富を生み出すシステムを時の権力者がただだまって放っておくことはなく，織田信長，豊臣秀吉が相次いで堺を自分の支配下におこうと，当時の堺の有力者であった今井宗休，千利休などを取り込み，また，その後，秀吉が，堺商人を大阪に強制移住させたことなどにより，堺の自治は破壊され衰退に追い込まれることになるのであった。

16 世紀後半，豊臣秀吉は大阪城築城に着手し，上町台地を中心に城下町の形成を開始した。この頃から大阪の北浜地区，いわゆる道修町を中心として，多種多様な薬業関係者が集まるようになり，17 世紀半ばにはすでに薬種屋仲間が存在していたことが確認されている[3)]。

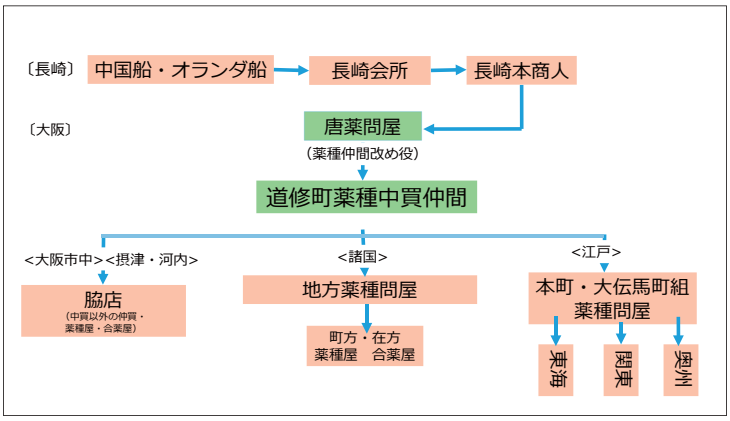



図１　江戸時代・唐薬の流通経路

その後，1722 年には道修町薬種中買仲間が成立し，**図１**のような薬の流通経路が確立された。当時の薬種中買仲間は，唐薬問屋からの実質的な独占購入権をもつ仕入れ問屋であり，輸入薬のみでなく国産生薬（和薬）も含めて共同で品質を調べて時価を勘案，値決めを行ってから買い取り，荷直しや封紙をして全国に卸販売を行っていた。このように，生薬集散の中心であった大阪には，この時代，北山友松子や永富独嘯庵など，多くの医家が集まり，医療を実践したことが知られている。薬種中買仲間は 1872 年（明治５年）の株仲間開散まで，150 年の間，日本の生薬流通の中核としてその役割を担っていた。

## 一貫堂医学と中島随象

1868 年（明治元年）に西洋医術採用許可令が布告され，その後，1876 年の西洋七科の制，1895 年の和漢医師継続請願の否決へと，明治政府発足後 30 年足らずの間に，日本における漢方医学は衰退の一途をたどった。この間，国内では室町期の曲直瀬道三の流れをくむいわゆる後世派と，江戸期の吉益東洞，尾台榕堂などの漢方を継承した古方派，それに江戸後期から明治初期にかけて活躍した浅田宗伯に代表される折衷派と呼ばれる漢方が，一部の医師や薬剤師により継承されていたのであるが，そのなかにあり，後世派医学の伝統を受け継ぎながら独自の体質論を基軸とした一貫堂医学と呼ばれる体系を作り上げたのが，森道伯（1867-1931）である。森道伯の生涯については『漢方一貫堂医学[4)]』に詳しく書かれているが，防風通聖散，通導散，芎帰調血飲，温清飲加減方，五積散などの多味剤を中心に駆使したその医学は，森道伯の死後，一貫堂森医院の診療を担当していた矢数格によって受け継がれ，矢数有道，道明をはじめ，多くの医師，薬剤師，鍼灸師などの門人を輩出した（**図２**）。なかでも，関西において唯一，一貫堂医学を継承したのが，中島随象（紀一）（1898-1985）（**写真１**）である。中島随象は千葉に生まれ千葉大学で医学を学んだが，矢数格との交流から一貫堂医学を知り，兵庫県神戸市において漢方舎中島医院を開業したのちは，生涯を通じて一貫堂医学を実践した。

当時，中島随象は神戸木曜会という漢方勉強会を主催しており，そのメンバーとして，山本巌，伊藤良という，その後関西の漢方界で重要な役割を果たした２人の医師がいた。また，随象は後年，日本で最初の公立の東洋医学研究機関とし

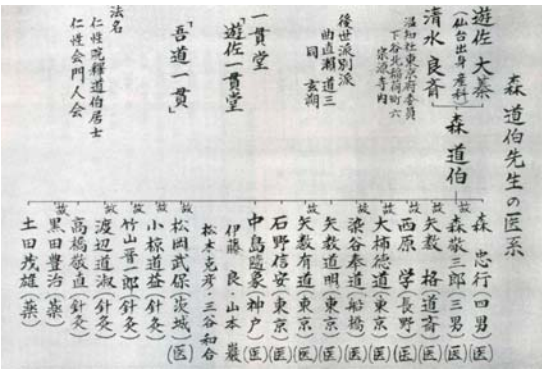


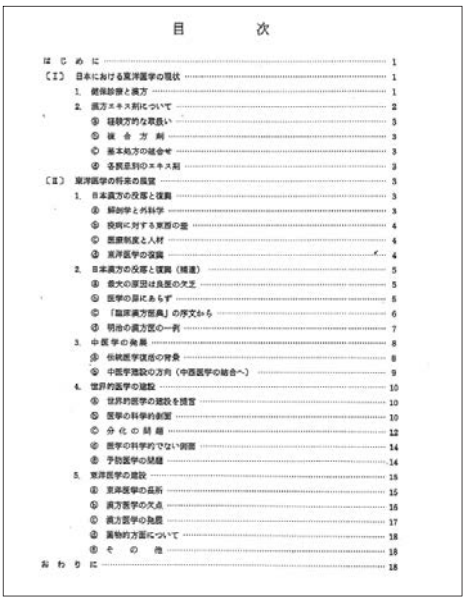

図２　森道伯の医系：仁性会記念会誌より

写真１　中島随象先生
（写真提供：中島正光氏）

て設立された兵庫県立東洋医学研究所の初代顧問をつとめ，後に同研究所所長となる松本克彦や，田川和光らに大きな影響を与えた。中島随象には著作といえるものがほとんどないため，これまで，彼の思想や実際の漢方治療に関しては，その弟子たちの回想などからしかうかがい知ることができないとされてきたが，今回の第４回日本中医学会学術総会をきっかけに，同氏の孫である中島正光氏のご厚意により，中島随象が会頭をつとめた第 29 回日本東洋医学会学術総会での会頭講演要旨集[5]を知ることができた。「東洋医学の現状と将来の展望」というテーマで書かれたこの 18 頁の論文は，中島随象の，おそらく現在手に入れることのできる数少ない著作の１つである。本文は，**表１**のような構成からなるが，このなかで，1967 年にはじめて薬価収載され，本文が書かれた２年前の 1976 年に 42 処方・62 品目が一挙に薬価収載された漢方エキス剤について，「正しい製品をつくり，品質の均一化が進めば，使用者は，生薬の保存，選品などに気をつかわなくて便利である。（中略）ある意味では漢方の主流になるかも知れない」と述べると同時に，加減のできないエキス剤について，「電動工具の交換部品や，一眼レフカメラの交換レンズ及びその他の着脱部品を除いた本体と同じようなもの」として，千変万化の病態に対応するためには，基本処方の組み合わせが大切であると述べている。

また，「中医学は医学の宝庫である」という随象は，「東西医学を結合させて新しい世界の医学を」という壮大な提言のなかで，「世界医学を作りあげるためにはまず，『東洋医学』を建設しなければならない」と述べ，「日本人は実に器用である。（中略）ただ，その器用さが禍してか，学問をつくるのは誠に下手である」ので，「公平にみると中医学の再輸入が（東洋医学の建設のために）最もよいと思う。学問をつくる最短距離ではなかろうか」と，日本における中医学の導入が「東洋医学」そしてその先にある「世界医学」の建設に必要なことであるとしている。

この時期に，医療用漢方エキス剤について正しい認識を行い，「世界医学を創りあげるため」に中医学を日本に再導入し新しい東洋医学を作り上げるべきだ，という中島随象の未来を見据えた見識は，その後，彼のもとに集う当時の気鋭の若手医師たちに，遺伝子が個体を超えて受け継がれるようにして伝わっていくのである。



目　　次

はじめに …… 1
〔Ⅰ〕 日本における東洋医学の現状 …… 1
1. 健保診療と漢方 …… 1
2. 漢方エキス剤について …… 2
① 経験方的な取扱い …… 3
② 複合方剤 …… 3
③ 基本処方の組合せ …… 3
④ 各製品別のエキス剤 …… 3
〔Ⅱ〕 東洋医学の将来の展望 …… 3
1. 日本漢方の没落と復興 …… 3
① 婦人科学と外科学 …… 3
② 疾病に対する東西の差 …… 4
③ 医療制度と人材 …… 4
④ 東洋医学の復興 …… 4
2. 日本漢方の没落と復興（補遺） …… 5
① 最大の原因は良医の欠乏 …… 5
② 医学の原にあらず …… 5
③ 『臨床漢方医典』の序文から …… 6
④ 明治の漢方医の一例 …… 7
3. 中医学の発展 …… 8
① 伝統医学復活の背景 …… 8
② 中医学建設の方向（中西医学の結合へ） …… 9
4. 世界的医学の建設 …… 10
① 世界的医学の建設を提言 …… 10
② 医学の科学的創造 …… 10
③ 分化の問題 …… 12
④ 医学の科学的でない側面 …… 14
⑤ 予防医学の発展 …… 14
5. 東洋医学の建設 …… 15
① 東洋医学の長所 …… 15
② 漢方医学の欠点 …… 16
③ 漢方医学の発展 …… 17
④ 薬物的方面について …… 18
⑤ その他 …… 18
おわりに …… 18

表１　中島随象会頭講演録目次

以下，中島随象の遺伝子を受け継いだ薫英たちについて，簡単ではあるがプロフィールを紹介する。

## 中島随象とその遺伝子

図２にあるように，森道伯の門人会である仁性会の資料では，森道伯を継承する者の１人として中島随象の名があげられ，その門下として，三谷和合，山本巌，伊藤良，松本克彦の４氏が記載されている。

以下，これらの薫英たちのプロフィールを紹介する。

### ―三谷和合（1928―1997）―

1952 年に京都府立医科大学を卒業し，その後，細野史郎，森田幸門，中野康章らを師とし漢方を学ぶ[6)]。大阪加賀屋病院の院長として，地域に根ざした医療を実践した医師であり，舌診における第一人者でもあった。関西においては，三谷氏は，日本古方派あるいは，細野診療所の影響を受けた人物として認識されることが一般的である。しかし，同氏の名が，仁性会一門として記載されていたことは，私にとっても意外であった。三谷和合と中島随象との交友については，おそらく神戸木曜会を通じてであったと思われる。神戸木曜会については，山之内薬局の西脇平士氏のホームページに，以下のように書かれている。「兵庫県には神戸の中島随象（大蘇）先生指導の神戸木曜会（かんぽう会）がありました。鍼灸の造詣も深かった医師の岸本亮一先生，古典研究で著名な医師の山本巌先生，古典素問霊枢や傷寒論金匱要略の泰斗小寺慰枝先生，（中略）医師の伊藤良先生や蔡宗傑先生などが居られました。（中略）また著名な森田幸門先生や杉原徳行先生，坂口弘先生や山元章平先生も支援され当時数少ない古典漢方の研究会でもありまし た。当時の各研究会へは東京の矢数道明先生や龍野一雄先生，山田光胤先生，京都の細野史郎先生門下の坂口弘先生，大阪の高橋真太郎先生，医師の

西山英雄先生や親交のあった三谷和合先生等とその他多くの先生方の御指導や御協力が御座いました。（後略）」。また，公式の記録ではないが，ここに，三谷和男氏（三谷和合の長男）のお許しを得て，和男氏の回想を書かせていただく。

「中島随象先生を師匠とした会は，神戸木曜会といって，父は勇んで出かけていました。（中略）随象先生に教えを請うことのできるこの日は，何よりも意欲をもって勉強に取り組んでいたのではないでしょうか。」

このように，神戸木曜会を通じて，三谷和合氏の漢方に，中島随象，および一貫堂漢方の影響があったことが推測される。

## ―山本 巌（1924-2001）―

1952 年徳島大学医学部卒業後，独自で中国伝統医学，台湾医学，朝鮮医学を学習。1961 年に大阪に診療所を開設後，1968 年より中島随象のもとに入門し，一貫堂を中心とした漢方を学ぶ[7]。山本巌と中医学との関わりは，1981 年発行の「東医雑録」から知ることができるが，その後 1989 年には，従来の日本漢方や中医学，さらには西洋医学の枠にとらわれない，新しい形態の漢方医学を目指した「第三医学研究会」を設立した。第三医学研究会にはその後，多くの医師たちが学び，そのなかから，彼の医学を伝えるべく，さまざまな書籍が発行されている（表２）。

## ―伊藤 良（1923- 現在）―

1943 年新京医科大学卒業後，1960 年頃より漢方を独学で学び，以後，中島随象に師事した。1970 年代に入った頃から中医学理論に接するようになり，上海中医学院編『中医学基礎』の翻訳出版をきっかけに，森雄材らとともに「神戸中医学研究会」の活動を開始した[7]。その後，多くの中医学書の翻訳を手がけ（表３），また，自らも，大阪漢方医学振興財団の理事長，同附属診療所の院長として，老中医との交流と中医学の研究，そして後進の指導にと精力的に活動を続けた。

## ―松本克彦（1934- 現在）―

1965 年に神戸大学医学部を卒業後，当時の第二生理学教室（須田勇教授）の大学院に進学。その頃，世界的に注目を浴びていた中国の針麻酔を知り，針灸の臨床研究を始めたことが，東洋医学との出会いとなる。その後，伊藤良氏の紹介に

①東医雑録（1)(2)(3)　山本巌（著）
②山本巌の漢方療法　鶴田光敏（著）
③漢方治療44の鉄則－山本巌先生に学ぶ病態と薬物の対応　坂東正造（著）
④病名漢方治療の実際－山本巌の漢方医学と構造主義－　坂東正造（著）
⑤山本巌の臨床漢方　坂東正造・福冨稔明（著）

①燎原書店　②～⑤メディカルユーコン

表２　山本巌を知るための本

神戸中医学研究会の出版物（訳・共訳・共著を含む）

中医処方解説（医歯薬出版，1982）
中医臨床講座１・２・３（燎原書店，1986）
中医臨床のための常用漢薬ハンドブック（医歯薬出版，1987）
金匱要略浅述（医歯薬出版，1989）
中医臨床備要（医歯薬出版，1989）
中医臨床のための舌診と脈診（医歯薬出版，1989）
中医臨床のための病機と治法（医歯薬出版，1991）
中医臨床のための中薬学（医歯薬出版，1992）
中医臨床のための方剤学（医歯薬出版，1992）
漢薬の臨床応用（医歯薬出版，1993）
中医学入門（医歯薬出版，1993）
基礎中医学（燎原書店，1995）
中医臨床のための温病条弁解説（医歯薬出版，1998）
中医学入門　第２版（医歯薬出版，1999）
医学衷中参西録を読む（医歯薬出版，2001）
症状による中医診断と治療上・下（燎原書店，2001）
常用中医処方集（燎原書店，2002）
中医臨床のための中薬学　新装版（東洋学術出版社，2011）
中医学入門　新装版（東洋学術出版社，2012）
中医臨床のための方剤学　新装版（東洋学術出版社，2012）
中医臨床のための温病学入門（東洋学術出版社，2014）

表３

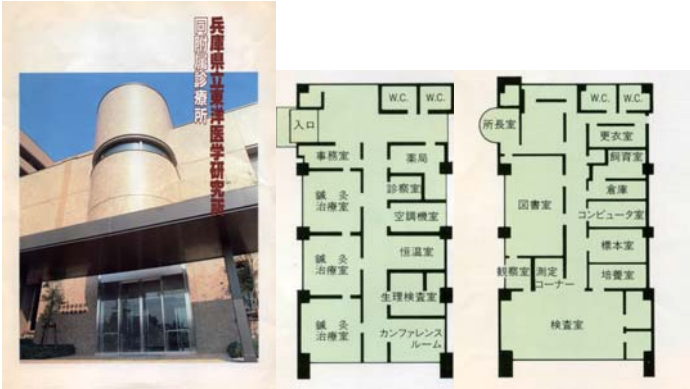



図3

より中島随象の門を叩き，一貫堂医学を学んだ。1977 年に公立の東洋医学研究機関としては日本初となる「兵庫県立東洋医学研究所」の発足とともに同研究所に入所。その後，副所長を経て，1989 年より 2000 年まで同研究所所長と県立尼崎病院内科東洋医学科科長をつとめた[8]。研究所の発足当時は県立尼崎病院の敷地内に建てられたプレハブの簡易な建物であったが，1986 年に移転改築した新研究所は，立派なラボや生理検査室（シールドルーム），動物飼育室まで完備した研究施設をもち，また，内外のさまざまな東洋医学関連の出版物を備え，さらに，針灸，湯液の臨床施設をも兼ね備えたものになった（図３）。この兵庫県立東洋医学研究所の初代顧問に就任したのが中島随象であり，松本克彦氏と中島随象との結びつきの強さをうかがい知るものである。彼の臨床は，中医学理論をもとに，随象から受け継いだ一貫堂医学を発展させたものであったが，日に 100 名以上の患者を診察する傍ら多くの執筆や講演をこなすという，その超人的な多忙さも，東洋医学に対する情熱のなせる業であった。同研究所は，残念ながら，本年（2015 年）に 40 年の歴史を閉じることになったが，現在も，県立尼崎病院には東洋医学を志す若手医師が少なからず集まってきているとのことであり，中島随象から松本克彦につながる遺伝子がここでも生き続けているのであろう。

## 終わりに

以上，簡略ではあるが，「なにわ」に息づく中医学の底流を，その歴史的な背景と，「日本最後の漢方医」ともいわれた中島随象と彼の４人の弟子たちのプロフィールを通して紹介した。この４人は，いずれも現代中医学が日本に紹介された 1970 年代に中島随象との交流をもち，そして随象が「黒船」と言った[9] 中医学の洗礼を受け，その後，それぞれの独自の世界を構築した巨人たちでもある。また，中島随象には，実子である中島泰三，若くして世を去った田川和光ら，彼の薫陶を受けた多くの医師たちがおり，さらに，彼らの弟子であるわれわれの世代にも，随象の遺伝子が受け継がれていることは間違いないのである。

## 参考文献

1）会田雑次ほか編：江戸時代人づくり風土記　大阪の歴史力．農山漁村文化協会，2000
2）與那覇潤：中国化する日本　日中「文明の衝突」一千年史．文芸春秋，2011
3）渡辺祥子：近世大坂　薬種の取引構造と社会集団．清文堂，2006
4）矢数格：漢方一貫堂医学．医道の日本社，1964
5）中島紀一：第 29 回日本東洋医学会学術総会会頭講演要旨集『東洋医学の現状と将来の展望』．1978
6）三谷和合先生追悼．漢方の臨床，Vol.44 No.10 1997
7）第 4 回日本中医学会学術総会抄録集．2014
8）松本克彦：今日の漢方診療指針．メディカルユーコン，2003
9）松本克彦：漢方一貫堂の世界　日本後世派の潮流．自然社，1987

## 謝辞

本稿作成にあたり，多くのヒントをいただき，また，文献を紹介いただいた小松新平氏，大事な資料を提供いただいた中島正光先生，三谷和男先生に感謝します。